

二〇二二年度 聖ドミニコ学園中学校入学試験（第1回）

国語

50分

◎ 次の注意事項（しごとう）を読んでください。

- 1 試験開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 2 問題は全部で9ページあります。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさんであります。
- 4 解答用紙に受験番号、氏名を書いてください。
- 5 答えはすべて解答用紙に書いてください。
- 6 字数は、句読点（くつとくてん）や「」など記号もすべて一字に数えます。

【一】次の~~~~線の漢字は読み方をひらがなで答え、――線のカタカナは漢字に直しなさい。

- ① 類るいいまれな才能を發揮する。
- ② エジプトを研究する考古学者を志しす。
- ③ なかなか開かない瓶びんの蓋ふたに閉ふ口くちする。
- ④ 緊急きんきゅう時ほどレレイイセセイな判断が必要だ。
- ⑤ この出会いは人生のテテンンキとなるだろう。
- ⑥ トクベツとくべつな許可を得て撮さつ影えいしている。
- ⑦ タンジュンたんじゆんな問題ほど奥おくが深いものだ。
- ⑧ キョウソウきょうそう社会の利点と欠点を考える。
- ⑨ メンセツめんせつ試験で何を聞かれるのか不安だ。
- ⑩ 山でめずらしい岩石をサイサイシユウしゅうする。
- ⑪ 米や小麦を海外からユユニユウゆうする。
- ⑫ 観客のハンノウはんのうを見ながら演奏をする。
- ⑬ 重要な客人にゴゴエイえいをつけて送迎そうげいする。
- ⑭ エイエンえいえんかと思うほど長い時間を過ごす。
- ⑮ これくらいこれくらいの雨なら旅行にシシシヨウしゅうウうはない。
- ⑯ ジュウオウじゅうおう無む尽じんの活かつ躍やくを見せる。
- ⑰ 改革にイイヨクよく的な候補者へ投票したい。
- ⑱ 花瓶かびんの水がジジョウしょうウうハツはつしてしまった。
- ⑲ ショウライしょうらいは社会のために貢こう献けんしたい。
- ⑳ 観光シーズンにはリンリンジじのバスが走る。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私たちの出発点は、自分自身が「交換可能」な存在であり、「かけがえのない存在」であると感ずることができないという「生きる意味の病」であった。そして私たちの到達点は、自分自身で自らの「生きる意味」を創造していく社会である。それはひとりひとりがオリジナリティーのある生き方を獲得する社会だと言ってもいい。

ここで言うオリジナリティーとは、よく使われるように「他の人と違う」という意味ではない。「君の意見にはオリジナリティーがない」といった言い方は「他の人と同じ」という意味で多く使われるが、それは必ずしも正しくない。オリジナリティーとは何よりもまず「①自分自身にオリジン(源)がある」ことである。他人の言うことをAにしたり、他人に同調したりして同じことしか言わなければそれは「オリジナリティーがない」ということになるが、私が自身の「生きる意味」を創造する中で結果的に他人と同じ結論に至るのならば、それは私のオリジナリティーなのだ。①

例えば、「お年寄りを大切にしよう」という発言を、それを言わないと学校の先生に怒られるからと復唱している学生にはオリジナリティーはないが、自分がボランティアに参加したり、自分のおじいちゃんとの触れ合いなどからお年寄りに対する気持ちを掻き立てられての発言ならば、それはBのあるものになる。「生きる意味」の創造者としての発言や行動なのか、「生きる意味」を②抑圧された者としての発言や行動なのかによって、同じことを言い、行動しても全くオリジナリティーの次元が異なってくるのである。②

私が「交換C」であり、「かけがえのない」存在であるとい

うことは、他の人とことさらに違うところを探すというわけではない。それは自分自身の人生にオリジナリティーがあるかどうか、自分自身が「生きる意味」の創造者となっているかどうかの問題なのである。③

この社会にはどこかに中心があつて、自分はその中心から遠く離れたところに押しやられていると感ずている人は多い。X、私は自身の「生きる意味」を創造し、私の生きる世界に意味を与える存在なのであり、世界の中心は私自身にあるのだ。しかし、それは「③自己チュー」の世界ではない。Y、私自身が意味を生み出す中心であることを認めるとき、私たちの周りには私だけでなくたくさん中心があることが分かってくるからだ。あの人もまた自分自身の「生きる意味」を生み出しながら生きていくひとつの中心である。そしてまたあの人も……。④

そこで私たちの世界には不思議な転換が起こる。かけがえのないあなたが傷つき、苦しむとき、私は私が傷つけられたように感ずる。かけがえのないあなたが喜ぶとき、私は我がことのように嬉しくなる。「かけがえのないなさ」とは「交換D」であることだと私たちはずっと思ってきた。しかし、私たちはともに苦しみ、ともに喜ぶ存在どうしなのであり、私たちの苦しみと喜びは交換Eであるのかもしれない。あなたが私の苦しみを負い、私がある喜びに生かされているのかもしれない。そこにおいて、私たちは「交換F」という思いに引き裂かれることからの大きな一歩を踏みだす。Z「生きる思いを共有できることの豊かさへと開かれていく。

私の「かけがえのないなさ」を追い求めてきた私は、世界の「かけがえのないなさ」へと誘われるのである。⑤

世界にはいたるところに中心があり、その中心どうしが互いを
 ④ 尊重し合う社会への道がそこにある。与えられた「生きる意味」
 を生きるのではなく、ひとりひとりが自分の人生の創造者となるよ
 う「生きる意味」を再構築していくことは、私の尊厳とあなたの尊
 厳とともに回復していく歩みなのである。

⑤ そんなプロセスをあなたは理想論の絵空事だと思っただろうか。

(上田紀行『生きる意味』)

問一 — 線①「自分自身にオリジン(源)がある」の説明として適
 当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分自身を「かけがえのない」存在であると証明すること。
- イ 自分自身の「生きる意味」を創造するのは自分だということ。
- ウ 自分自身を「他の人と違う」存在として確立していくこと。
- エ 自分自身が「他の人と同じ」存在であると受け入れること。
- オ 自分自身が「生きる意味の病」を抱えていると自覚すること。

問二 A に入る言葉として適当なものを次から一つ選び、
 記号で答えなさい。

- ア 鵜うの目
- イ 猿さる真似まね
- ウ 猫ねこの目
- エ 虎とらの巻まき
- オ 鵜う呑のみ

問三 B に入る言葉を本文から8字でぬき出しなさい。

問四 — 線②「抑圧」・④「尊重」を含む例文として、言葉の使
 い方が間違っているものを次から一つずつ選び、それぞれ記
 号で答えなさい。

② 抑圧

- ア 言論の自由が抑圧されないように抗議する。
- イ 弱者が抑圧されてきた歴史を繰り返さない。
- ウ 抑圧された感情を解放することを心がける。
- エ 新しい発明は人々から好意的に抑圧された。

④ 尊重

- ア 話し合いの場では他人の意見を尊重しよう。
- イ 相手の立場を尊重して考えることが大事だ。
- ウ 亡き祖母の希望を尊重して遺産を寄付した。
- エ 子どもを尊重して病院へ強引に連れて行く。

問五 C F に入る言葉の組み合わせとして適当なものを
 次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア C…不可能 D…不可能 E…可能 F…可能
- イ C…不可能 D…可能 E…不可能 F…可能
- ウ C…可能 D…可能 E…不可能 F…不可能
- エ C…可能 D…不可能 E…可能 F…不可能

問六 X Z に入る言葉の組み合わせとして適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア X…しかし Y…なぜなら Z…そして
イ X…なぜなら Y…そして Z…しかし
ウ X…そして Y…しかし Z…だから
エ X…ところで Y…なぜなら Z…そして
オ X…しかし Y…ところで Z…だから

問七 ー線③「自己チュー」とありますが、本来は「自己」と表記します。に入る言葉を本文から2字でぬき出しなさい。

問八 次の段落は、本文の15のどこかに入ります。適当な場所を一つ選び、1～5の番号で答えなさい。

かけがえのない存在がここにいて、あそこにもいる。世界の中心がここにもあり、あそこにもある。私たちひとりひとりをオリジナリティーの源泉として見るとき、世界のいたるところに「かけがえのない」オリジナリティーの中心が見えてくる。私のかけがえのなさを見出すことは、あなたのかけがえのなさを見出すことでもある。そしてあなたのかけがえのなさに気づくことは、私のかげがえのなさに気づくことにもなるのである。

問九 ー線⑤「そんなプロセスをあなたは理想論の絵空事だと思っただろうか」について、次の(1)・(2)に答えなさい。

(1)「そんなプロセス」の説明として適当なものには○、適当でないものには×をつけなさい。

- ア 自分は「他の人と違う」という「かけがえのなさ」を時間がかかっても見つけ出す。
イ 社会の中心から与えられた「生きる意味」を「かけがえのないもの」と受けとめる。
ウ 結果的に他人と同じ結論では無意味なので必死に自身の体験にもとづいて発言する。
エ 自分は「かけがえのない存在」であり「生きる意味」を生み出す中心なのだと認める。
オ 「かけがえのない私」と「かけがえのないあなた」が生きる思いを共有しながら歩む。

(2)「そんなプロセスをあなたは理想論の絵空事だと思っただろうか」という問いかけに対して、あなたは「思う」と「思わない」のどちらで答えますか。

- i 解答欄の「思う」と「思わない」のどちらか一つを選び、○で囲みなさい。

- ii 選んだ理由を、解答欄に入る長さで説明しなさい。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

《これまでのあらすじ》小学五年生の雪乃が長野県に引っ越してから数か月たった。雪乃は、父（航介）や母（英理子）、同級生の大輝、大輝の父親（広志）とともに、大晦日の夜にお寺へ出かけた。

ふいに、髪を撫でられた。

驚いて隣を見上げると、優しく和んだまなざしが雪乃を見つめていた。

「あなた、また背が伸びたね」

と、英理子が言う。

「そ……そうかな。変わってないと思うけど」

戸惑う雪乃に、

「ううん、伸びた伸びた。前はお母さんのこのへんだったじゃない」

英理子がてのひらで自分の胸より下を指すのを見て、航介が笑った。

「いつの話だよ、それ。こっちへ移ってくる前から、雪乃の背丈、

もう英理子の肩ぐらいまであつたぞ」

「えっ、そうだったっけ？ ……そっか」

① 英理子が、しみじみと雪乃を見つめる。

と、すぐそばにいた大輝が、何やら気まずそうに離れて父親の向こう側に隠れた。

「なんだあ、おまえ。自分の背が伸びねえこと気にしてんのか？」
と、広志がからかう。「だあいじょうぶだあ、女は先にでっかくな

るからおっかなく見えるけど、男だって後から
ら。今にすーぐ追い越すって」

雪乃は、A 眉根を寄せた。だから、なんでわざわざそういうことを言うのか。言葉にされたら大輝も自分も居心地が悪くなるだけなのに。

こういうデリカシーのないところは、じつは航介にもある。悪気のない無神経さ。男ってばまったく、と思ってみる。お母さんが以前から時々ぶつぶつ言っていたのは、こういうことだったんだろうか。

そうしている間にも、除夜の鐘は響く。

英理子が、雪乃にだけ聞こえるように、ぽつりと言った。

「こんなに背が伸びてたのに気がつかなかつたなんて……もしかしたら私、雪乃のことを、まだまだ小さい子どもだっていうふうに思いこんでいたかつたのかもねえ」

言いたいことは伝わってくるけれど、それもなんだか寂しい。

「子どもだよ」

と、雪乃は言った。甘えた感じの言葉が、大輝なんか聞こえる
と恥ずかしいから、小声で言った。

そうこうするうちに、ようやく鐘を撞く順番が回ってきた。前にいるのは、あと数組きりだ。後ろにもまだ人が並んでいるから、大人は撞かず、子どもたち二人に任せようと言われて、雪乃はたちまち緊張した。

「おまえ、先にやっつていいよ」

にこりともせず大輝が言う。もう何度か会っているのに、いつも仏頂面で、用事がない限りほとんど口をひらかない。なのに、

② 「おまえ」呼ばわりだ。えらそうに。

「え、困る。私、やり方わかんないし」

「前のやつ見てりやわかるじゃん」

「あんたこそ、慣れてるんでしょ。やってみせてよ」

すると大輝は、露骨に顔をしかめた。返事もせずに、雪乃の先に立つ。

鐘楼の上まで上がってみると、^③梵鐘は思っていたよりずっと

大きかった。黒々とした内側の闇に、何かか潜んでいそうで恐ろしい。撞木もまた太く長く、前後がV字の綱に吊されている。

自分の番が来ると、大輝は、それまで鼻先を埋めていたマフラーをつかんで、ぐいっと押し下げた。父親によく似た利かん気な顔立ちが露わになる。

撞木の前寄りに下がっている綱をしつかり握りしめ、両脚を前後にひらき、上半身を使って前後に揺らす。その動きが、一往復ごとに大きくなってゆく。

鐘に丸太の先が今にも触れるか、次こそ触れるか、と息を呑んで見守るうちに――、

ゴーーウんンンン。

ほとんど鐘の真下にいる雪乃の耳には、2 広がってゆく残響のほうが大きく聞こえる。

「おお、凄いな、慣れたもんだな」

航介と英理子が拍手する。

撞木の揺れがおさまるのを待って、綱からそっと手を離れた大輝がそばへ戻ってきた。

「ほら、簡単だろ。やってみな」

カチンときた。

何が簡単なものか。見ているのと、自分で撞くのととは全然違う。毎年のように撞いているあんたにとっては造作も無いことだろうけれど、こちらは生まれて初めてなのだ。

雪乃は、進み出た。こんなことで大輝にこれ以上えらそうな顔をされたくない。列に並んでいる間にも何度か^④間の抜けた音を聞いたが、あんなふうなへマをして、自分より背の小さい男子から馬鹿にされたくない。

撞木の下に立つ。鐘が、ますますもって大きく眼前に迫る。ぼこぼことした表面の突起が、まるで生きものの皮膚のようにも見える。撞くべき箇所なんて考えなくとも、吊された撞木を前後させればちゃんと当たるようになっていく――と、頭ではわかるのに、全身が緊張する。

垂れ下がる綱へと両手を伸ばし、右手は頭より少し高いところを、左手は顔の前あたりを握った。予想よりも太く、手の中におさまりきらない。はつと気づき、大輝がやっていたように脚を前後に開く。そうして、まず綱を、後ろへ引いた。

重たい。たいして動かずに撞木が戻る。その動きを引き戻そうとしても無駄なのがわかった。揺れるに任せて、綱はあまりきつく握りしめてはいけならしい。

何度か往復させるうち、こつがつかめてきた。撞木そのものの重みをうまく利用して、少しずつ縄に力を加え、揺れを助けてやる。

頭の隅にふと、前に両親と行ったフィールドアスレチックでのタワーガンごっこがよぎった。縄につかまって、向こう側へと飛び移る。そうだ、あの感じ。

さっきの大輝と同じく、Xを二度、三度とくり返した後、雪乃は、思いきって全体重で綱にぶらさがった。

ゴーゴーウンンンン。

勢い余って鐘の真下に入り込んだ身体が、残響に3痺れた。緊張がゆるむと、頭がぼうつとした。皆のところへ戻った雪乃の肩を、⑤広志がぼんぼんと優しく叩く。

と、その陰にいた大輝と目が合った。また前のように鼻先をマフラーに埋めた彼が、くぐもった声で言った。

「やるじゃん」

「えっ」

びっくりして、思わず声が出た。

「そ……そうかな。ちゃんとできてた？」

「生まれて初めてなんだろ？ 上出来なんじゃねえの」

物言いは相変わらずBぶつきらぼうだが、どうやら褒めてくれているらしい。それより何より、大輝との間に一往復以上の会話が成立したことに驚く。

後の人に場所を譲って4鐘楼から降り、再び狭い道路を渡って神社の境内へと戻る。ちようどお詣りの列の後ろに並んだ時、あちこちから拍手や歓声が聞こえてきた。

「あれ。明けたかや？」

広志の言葉に、雪乃は慌てて腕時計を確かめた。ほんとうだ、零時ぴったりだ。

「明けておめでとうございます」

皆が口々に言い、互いにあらたまって頭を下げる。雪乃と大輝も、なんだか面映ゆいままに、ぺこりと会釈し合った。

時計の長針と短針が完全に重なることは珍しくないけれど、元旦の零時ばかりは、一年にたった一度しか巡ってこない。そのへお年越しだって、去年と今年では全然違う。このお正月は、家族三人が離れて暮らすことになってから迎える初めてのお正月なのだ。

みんな一緒に暮らせないのは、もちろん寂しい。でもそのかわり、ここでの暮らしには、ちよつと前までの息苦しさはない。目の前に壁が立ちほだかっているかのような気分だ。今では高台から大きな風景を見はるかしているような気分だ。ちようど、あの納屋の窓から見おろした景色のように。

雪乃は手袋をはずし、ポケットをまさぐった。小さな財布を握りしめる。

⑥いつもの年より、お賽銭を奮発しよう、と思った。

(村山由佳『雪のなまえ』)

問一

1 4に入る言葉として適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア ぞろぞろと
- イ ぐわんぐわんぐわんと
- ウ びりびり
- エ じりじり
- オ ぐんぐん

問二 ――線A「眉根を寄せた」・B「ぶつきらぼう」の意味として適当なものを次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

A 眉根を寄せた

- ア 意外だと思って目を見開いた。
- イ 気まづく思つて顔をそむけた。
- ウ 困つたと思つて目をそらした。
- エ いやだと思つて顔をしかめた。

B ぶつきらぼう

- ア そつけないようす。
- イ あつけないようす。
- ウ くだらないようす。
- エ だらしないようす。

問三 ――線①「英理子が、しみじみと雪乃を見つめる」とありますが、このとき英理子はどのようなことに気づいたのですか。次の□に入る言葉を本文から10字でぬき出しなさい。

雪乃を□10字□だと思つていたが、そうではないということ。

問四 ――線②『おまえ』呼ばわりだ。えらそうに」とありますが、

「えらそうに」という思いをこめて、雪乃は大輝のことをどのように言い表していますか。本文から11字でぬき出しなさい。

問五 ――線③「梵鐘は…恐ろしい」とありますが、このように

感じている雪乃の目には、梵鐘がどのように見えているのですか。たとえを使つて言い表した一文を、――線③より後

の本文から探し、最初の5字をぬき出しなさい。

問六 ――線④「間の抜けた音」とはどのような音ですか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雪乃より年下の子どもが、遊びながら撞いた鐘の音。
- イ 前の人が撞いた後、長い時間をあけて撞いた鐘の音。
- ウ 先に撞いた人が、うまく鳴らせずに失敗した鐘の音。
- エ 並んでいた順番を、うっかりまちがえて撞く鐘の音。

問七 □X□に入る内容を、自分で考えて20字以内で答えなさい。

問八 ――線⑤「広志がぼんぼんと優しく叩く」とありますが、ここからは広志のどのような気持ちを読み取れますか。適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雪乃なら来年はもつとうまく鐘を撞けるようになると思ひ、はげます気持ち。
- イ 雪乃がうまく鐘を撞こうと努力して見事成功させたことを、ねぎらう気持ち。
- ウ うまく鐘を撞くことができずぼうぜんとしている雪乃を、なぐさめる気持ち。
- エ 慣れている大輝よりもつとうまく鐘を撞いた雪乃を、ほめたたえる気持ち。

